こいふよりも寧ろ、躾の最容易年齢と考へられることになる。その結果、躾けが教育の方法として考へられるよりも、躾けるか（卽ち教育するか）教育しないか（卽ち躾けないか）の二つに對立されられたのである。從つて、自由とか自然とかいふことも、教育の方法としてよりは、教育しないこと、教育しないがよいといふこと、として根本的放任放置主義であつたり、又その反對に、躾けることなると、無制限不自然の强要や無理や無茶さへが行はれ勝ちであつた。

幼稚園の教育原理が、幼兒をこの放任と無理から救つたものであることは、こゝに再說を要しない。フレーベルの先驅的明識は、その點で顯著なるものである。しかも、それが前述の第一期から第二期への移行過程の反動性や急速性やのために、フレーベルの教育的明識を超えての行き過ぎ走り過ぎる傾向を生じた。殊に、教育精神よりも、教育の方法興味に淺く居る淺薄者流によつて、幼稚園の名に於て、自然や自由が、尤もらしく弄ばれたりさへした。教育としてのそれでなく、自然の爲の自然、自由の爲の自由、そんなことは、苟も教育精神あるものゝ考へる筈のないことであるが、幼兒教育の第一期的弊害の是正の爲と、ごこまでも幼兒教育の方法上の一つの特色として考へられてゐることが、幼稚園內部にも外部にも、よく理解せられなかつたりした。さうして、遺憾なことは、事實上弊害をさへ生じたのであつた。

かうした誤まれる傾向、憂ふべき傾向に對して、革正が行はれなければならぬことは勿論である。識者の間に、憂慮と警告との聲が漏らされたのは當然である。教育審議會が幼稚園の重要性を議決すると共に、躾を重んずべきことを明示したのは、恰かも此の時であつたのである。次いで國民學校が躾の尊重を以て自らその教育方針とした。そして、國民生活體制の强化を必須とする大東亞戰下の今日の教育になつた。幼稚園の場合、躾は斯うして、その保育の重點となつたのである。

（つゞく）

我が國の武士の躾

東京女子高等師範學校教授　石川謙

一口に武士と言つてもそれには色々の場合があるから一

概には言はれない。鎌倉・吉野・室町・安土・桃山・江戸と言つたやうな時代の移り變りにつれて武士の教養にも、本質にも、境遇にも大きな移り變りがあつた。細かに言へば江戸時代の內でさへも初期と末期とではかなり大きなひらきが武士の生活の中に見出される。又武士の身分の相違が甚だ大きかつたのでそれによつても、躾の上にかなり重大な相違があつた。將軍家とか、大大名とか言つたやうな最上流の武士の家庭にあつてはかなり貴族的な、文學的な教養と共に、政治する人としての躾、人に上たる人としての躾が重んぜられたのであるし、五十石取り、三十石取りの低い身分の武士にあつては數ある武藝の中の一藝と、ほんの僅かの學問とを外にしては武士一通りの禮儀作法と、さうしたものの中に含む武士の魂とが率直に、單純に仕込まれたのであつた。ひとり身分の上下だけではない。その家が祐筆であつたり、儒官であつたり、茶坊主であつたりした樣な極端な場合は別としても、槍を以つて立つ家、鐵砲組に屬する家と言つた樣な家に屬する職分の相違によつて、此處にも少からぬ躾の上の相違が現はれてゐた。このやうなわけで武士の躾を墨黑々と一筆書きにしてしまふ事は出來ない相談である。その上に年齡によつて躾のおもむきが次次に移り變つてゆくのであるから細かに言へば限りのない話である。そこで今は江戸時代中期以後の、中流の武士の家庭の、しかも稚い子供に對する躾について、やゝ漠然とした話を進めて見よう。

二

武士の子供の躾について第一に眼をつけなければならぬことは家庭生活それみづからが何よりも大切な教育上の雰圍氣をつくつてゐた事である。子供の世界を大人の世界から獨立させて、子供を大人の道德や禮儀の拘束の外に、治外法權的な存在として眺め、さうした上で子供の生理的な特徵を直ちに子供の社會的な、道德的な法則として認めやうとする所謂幼兒教育の新方法は明治以後に於ける西洋文化の影響にもとづくものである。たとひそこに長所と缺點との交響樂が奏せられてゐたにもせよ兒童研究の進步は、もとより子供の爲に幸福であり、從つて國家の爲にも有益であつたに相違ない。がしかし武家の家庭に於いては、さうした子供の世界の獨立性はそんなに嚴格には承認されてゐなかつた。從つて生活のどの場合に於ても、親と子供とは一體であり、子供の生活は大人の生活の中に、あみこまれてゐた。及ばぬながらも子供は年端もゆかない稚い頃から道德的・傳統的な生活の仕方に於て、既に家族の一員であり親と子と共に從ひ共に守る共同の規準を持つてゐたのである。この意味に於て子供は始めから祖先につながり、祖先の遺風につながる生活の主體者たるべく養成されてゐ

た。具體的に言ふと、子供は生れ落ちるとすぐに、氏神樣――多くの場合には藩祖を祭つた神樣におまゐりさせられる。つづいて食ひはじめの式があり、髮置きの式があり、袴儀の式があり、元服の式があり、と言つた樣に生活の折目、切目に家を主體として子供をめぐる色々な儀式が行はれたのである。かうした儀式の中に子供は、知らず〳〵ではあるが家の者、國の者として育つて行つたのである。儀式を我が身のものとする躾が、我が身を我が家、我が國のものとする基本的な考へ方と共に成長したのである。かうした儀式は言ふまでもなく、子供の教育の爲に、子供の躾の爲に考へ出された行事ではなくて、否むしろ家や國が子供を迎へる儀式として考へられるはづのものであるが、それでゐてそれは立派な躾の役割を演じてゐた。儀式だけではない、武士の家庭の日常生活、父のつとめ、母のつとめ、父のあそび、母のくつろぎを內容とする每日〳〵の家の生活それみづからがその君とするところへの忠勤、その先祖とするものへの孝養を通じて轉廻してゐたのであるから、それは勤めの仕方や、仕事の內容と共に、武士の魂を染み込ませてゆく力を持つてゐたのである。このやうに家の生活全體がそれみづから教育的な大きな力を持つてゐた事はそれは武士の家庭の仕事が全體として簡素であり、單純であり、さうして所謂分業的な大資本主義的な姿をとらぬまとまりのついたものであつたことが大きな理由となり、事情となつたであらう事は疑はれない。

三

これまで述べて來た樣な、基本的な地盤の上に武士の家庭ではその子を仕込むのに色々な工夫が長い武家生活の傳統の中からあみあげられてゐた。天保年間に出來た『前訓略』といふ書物があつて、武士の子供の每日々々の生活を導く指針を簡單に書きしるしてゐる。それによると、

朝はやく起き　口すゝぎ、手水つかうて　一ばんに、
まづ神樣を　拜むべし、これ日本は　神樣の、
御國なれば　神樣の、そのお蔭にて　たれ〳〵も、
のみ食ひ衣服　着る事も、みな神樣の　お蔭ゆゑ、
第一ばんに　神樣へ、御禮儀をなして　おん禮を、
うやまひ深く　申すべし。ぢき其の次に　御城の、
方へ手をつき　御禮を、申し上ぐべし　神樣と、
御恩はおなじ　事ぞかし。さて其の次は　御佛壇、
御先祖さまを　大切に、厚くつゝしみ　拜むべし。
ひいぢぢ樣や　ひばば樣、きつと正しく　佛壇の、
內にござらせ　らるゝなり。

この樣にしるされてゐる。これで見ると朝起きるとすぐに手を洗ひ、口をすゝいで體を淸めて第一番に神樣を拜む樣に躾たものである。日本は神國であつて、神樣の御恩に

よつて、かうして生きて居られるのであるから、毎朝々々その御禮を申し上げるのである。我が獨特の尊い國柄に對する自覺と感謝報恩の厚い固い信念とを結びつけて、國家觀念を朝な朝な、成長させる樣にしむけてあつたのである。次に我が直接の主君たる殿樣のゐますお城の方へ向つて、手をついて御禮を申し上げさせるのである。さうして第三番目には、佛壇を拜む事になつてゐるが、これは我が家の先祖の御恩を身にしみ〴〵と味はひしめて、御禮を申す意味である。かうした朝の行事の中に於て、國恩を思ひ、藩侯の恩を思ひ、先祖の恩を思ふ國民的な自覺が信念としてめざめさせられてゆくと共に、報恩感謝をもとゝする我が國民道德が立派に幼い者の胸の中に培かはれてゆくのである。

四

國を思ひ君を思ひ親を思ふ感謝の念と共に　報恩の爲に命を捧げる覺悟と、報恩の事業の爲に立派に役立つ爲の日頃の修練とが重んぜられてゐた。その修練の大事な一つの部分として言葉の遣ひ方についての躾があつた。言葉の中に人の魂がやどり力がやどるのであるから、いかにも武士らしい言葉を學ばせることは、言はゞ魂を養ふ大切な躾でもあつた。『武詞短歌』といふ言葉遣ひを中心とした教科書が出來てゐて一般武士の家庭では、かうしたものを規準としてその子を躾けたのであつた。いふまでもなく武士の言葉といふと、おのづから戰場に於ける軍令軍規に關するものが主となるのである。ある意味からいふと、さうした場合に於ての言葉の重要性がしみじみと體驗せられてゐるのであるから、したがつて日頃から言葉の躾がなか〳〵嚴格であつた。

武士は、　詞のうへも、　氣をつけて。　をくれきたなき言の葉も、常にも言はで　敬しめば、　事にのぞみし其の時も、自然と恥辱　なきぞかし。

かういふ心得を念頭に疊ませておいて言葉の遣ひ方の中に武士たるものゝ魂を培養しようとしむけたのである。「言葉は心の衣服」といふ格言があるが、言葉にやどる精神の强さ、毅かさ、氣高さを養ふが爲の武士の家庭の躾である。切らせた射させた突かせたは、味方のものゝ武者詞

討死するを味方にて、　とぐると言ふぞ、備へをば、
幾手々々と、敵のは　幾切れにして立つといふ。
人數は進む、懸るとも、　敵は寄すると言ふものぞ。
にぐるといふは敵方の　人數を引くを言ふぞかし、
味方はのくる引取るぞ……

このやうに、使ふ言葉の端々にも攻擊精神をこめて武士らしい意地を立て通すやうに躾たものである。言葉の一つ一つにも、いざ命をかけての戰といふ日への心構へを籠め

て躾たといふことなどは今の私共の學んでよい點であらうと思はれる。

五

武士の家庭では何時如何なる時でも、いざ戰爭といふ場合を目あてにして、それに役立てる樣に躾たものであつた。從つて忠義の精神を中心としたのは言ふまでもないが約束を重んじたり、恥を飽くまでも受けない樣に仕向けたりした事は言ふまでもない。日頃から質素な生活に慣れさせたり、寒さや、飢に對して耐へ忍ぶ習慣をつけたりする樣にしたのもこの目的から來てゐるのである。從つて武士の躾の中では常に剛毅と柔順とが手を結んで隣り合つてゐたし、死をおそれないことゝ、命を大切にすることゝが一つの精神の二つの面として考へられてゐた。さうして、かうした精神的な魂の修練とも言ふべきものが實は學問や武藝の稽古にも家の中でのさゝやかな言動の端々にも、滿ちてゐるやうに仕込まれて、その日〳〵を目に見えぬ戰場として暮す事になつてゐたのである。

この樣に考へて來ると武士の子供の躾は大人の生活の中から自然に生み出されて來るのであつて、此處にも大人の生活全體が武人らしい簡素さと單純さを以つて立派に教育的な力を備へてゐたのである。わざとらしい、あたかも活花・切花の樣な行儀や躾が特別に仕立てられてゐたわけではない。だから子供はいつでもその子供らしさを手ばなしに、無制限に歡迎される事は全くなかつた。子供の內から大人へ大人へと急いだのである。さうして、そこにも、それほどの意味に於ての『子供』がなほ且つ見出されてゐたのである。

始めの躾

附屬幼稚園　清水光子

始めが肝心といふことは躾をしてゆく時殊に强く言はれてよい事と思はれます。家庭から幼稚園といふ社會に入りたてには、子どもの小さい心はさぞ新しい事、珍しいことで忙しいでせう。始めて大勢の世界に入つた事が何よりも